



語学研修部の三つの活動 ^[1]

関川富士子

ベルリン日独センター語学研修部長

ベルリン日独センター語学研修部はドイツ語で「Sprachendienst」、英語でいうところの「ランゲージサービス」です。それがなぜ「語学研修部」という日本名になったかということ、通訳・翻訳業務および広報・出版業務だけでなく、日本語教育という業務も含んでいるからです。そして、まさにこの日本語教育こそ、1986年にセンターが仮事務所で運営を開始すると同時に着手した活動でした。

日本語教育

センター設立以前からベルリン市内には様々な日本語教育機関がありましたが、センターは「競合」ではなく「補完」を方針とし、ベルリン商工会議所と共同で1986年にビジネスマン対象の日本語講座を開講しました。当時は初心者講座、それも一学期に20名前後が参加する講座ひとつしかありませんでしたが、経済学や理工科を専攻する大学生が参加するようになると、社会人と学生では受講目的も学習態度も異なることが分かり、1988年に大学生を対象とする講座を新たに設けました。ここでも「補完」の精神にのっとり、大学で日本語を学ぶ機会のある日本学専攻の学生は受け入れないことにしています。

以来、ビジネスマン対象の講座も学生対象の講座も初心者講座だけでなく、300時間を目安にする初級レベルの終了まで講座数を徐々に増やしていくことができました。そのような頃、ベルリン市内の他の日本語教育機関では様々な事情により、中級以上の講座を開講できない事が分かりました。そこで、今度は中級および上級の講座を充実させるよう努めました。

また、通訳・翻訳業務ともかかわる業務として、日本語講座ではありませんが、センター設立以来懸案事項であった日独語の通訳者養成講座も——「講座」という形こそとっていませんが——1993年に「日独通訳勉強会」という形で発足しました。

このようにして10年近く、センターの日本語講座は順調に発展し、今では初級から上級まできめ細かくレベル分けされた講座に毎学期150名前後の参加を得ています。

「順調」とはいつても、全く問題がないわけでもありません。たとえば「日独通訳勉強会」以外の講座の講師は全て外部の力に頼っているため、人材確保が問題となります。あくまで「補完」がモットーですからベルリンの他の機関の講師を引き抜くことはできません。また、日本から日本語講師として就職希望のお便りをくださる方もいらっしゃいますが、コマ数による報酬では生活の糧にはならず、あくまでもサイドビジネスの域をでないため、お断りせざるを得ません。

1. 本原稿は、ベルリン日独センター（編）『ベルリン日独センター十周年』（ベルリン、1995年）の43頁～48頁に掲載したものに若干修正を施したものである。

もうひとつの問題は、やはり予算です。世の中の全ての問題の大元は究極的にはすべて予算にあるといえるかもしれませんが、センター日本語講座も例外ではありません。非営利機関であるセンターは日本語の授業で利益をあげるつもりはありませんが、講師も教室も費用はかかります。また、センターが無償で日本語授業を提供しては「補完」の精神に反しますし、「日本語がどんなものかちょっと覗いてみよう」という人も参加してしまい、限られた人数しか受け入れられない現状では日本語を本当に必要としている人があふれてしまう危険性もあります。また、無償だと生徒のやる気がつづかないという講師の声もあり、誰もが支払える範囲の授業料を徴収することにしています。結果として、コマ数を増やすたびにセンターの赤字が増えるわけですが、そういう状況にもかかわらず「教育はただ」「学問は市民の権利」というドイツ人の意識は根強いようで、60分で3.20マルクから6.20マルクの授業で「高い」という声が聞かれます。日本の塾、カルチャーセンター、コミュニティーカレッジ、様々な語学学校等の繁栄ぶりをみると考えられないような現象です。また、限られた予算では開催可能なコマ数も当然のことながら制限されるため、なるべく多くの人にチャンスを提供しようとクラスの参加者を18名としているのですが、これを「多すぎる」という声もあります。

人材確保も根本は予算問題であり、これは解決策のない問題としてこれからも残っていくことですが、センターの活動基本方針にのっとり、日本語授業は今後もつづけていきたいと考えています。

通訳・翻訳業務

センター語学研修部と聞いてベルリン市民が先ず思い浮かべるのは通訳および翻訳業務でしょう。実際、通訳や翻訳の依頼に関する問い合わせは多く、その仲介もサービスとして行なっております。これは、センター語学研修部の作業量がスタッフ数に比べて余りに膨大なため大半の翻訳を外注している状況では外部の依頼にまで応えることなどとうていできないことから、せめてものサービスとして行なっているものです。

日独語を中心に活動し、一部、英語も必要とされる通訳・翻訳業務の本来の内容は、センターで2ヶ国語以上のシンポジウムが開催される場合の通訳およびシンポジウム報告集出版のための翻訳です。

通訳・翻訳業務と一口にいても、通訳と翻訳では内容は全く異なります。そして通訳といっても同時通訳か逐次通訳かで異なりますし、翻訳といっても和文独訳と独文和訳とでは大きな違いがあります。

シンポジウム通訳は同時通訳の形で行ないます。講演会なども同時で行なう場合があります。逐次通訳はもっぱらレセプションや晚餐会等の挨拶やスピーチの通訳です。同時通訳と逐次通訳の違いは、逐次では最悪の場合聞き返すチャンスがあるのに対し同時は一発真剣勝負で、逐次のアウトプットはそのまま印刷に回せるほどの水準に達しているのが望まれるのに対し、同時では話者の話し方にも左右されるためそれほどの水準は望まれていない、ということで、どちらがより難しいとか簡単だということではありません。ただ、私の経験からすると逐次通訳が上手な人は努力すれば同時通訳も上手くなる可能性を秘めているのに対し、同時通訳の上手い人でも同時通訳ばかりしていると逐次通訳の腕が落ちてしまう、ということがあります。そこで上述の通訳勉強会では逐次通訳の練習を徹底的に行なうところから入りました。

同時通訳でも逐次通訳でも、語学能力は不可欠です。インプットする言葉の聴解力、アウトプットする言葉の表現力、両方の言葉の語彙、内容に関するある程度の知識、これらがなくては通訳は務まりません。そして絶対に必要なのが度胸と体力です。逐次通訳の場合にはこれに愛嬌、サービス精神、演技力、といった付加価値が必要となります。だからこそ、同時通訳ばかりしていると逐次通

訳の腕が落ちてしまうのです。

機械翻訳の可能な時代になぜ「愛嬌、サービス精神、演技力」なのかと考える方もいらっしゃるでしょう。それは、やはり「人間相手の仕事だから」ということにつきまます。通訳者は専門能力を提供する職人であり、芸術家であり、サービス業の要素も若干供えていなければならないのではないでしょうか。内容だけを機械的に置き換えるのではなく、そのニュアンスを、雰囲気、行間の含みを伝えることも私たちの役目です。

言い換えれば、通訳の第一歩は「正しい聞き取り」、それも「ニュアンスを含めた聞き取り」にあります。話者の話しを正しく聞き取れなければ正しいメッセージを伝えることもできません。つまり、アウトプットの前にインプットがあるわけですが、この関連で通訳者にとって最大の問題が同音異義語です。これに関しては「同音異義語の失敗談」^[2]としてまとめてみましたので、そちらをご参照ください。

さて、聞き取りに問題がなくてもアウトプット言語での表現力が不足していたら話しになりません。これは一人ひとりが努力する以外に道はありません。

そして、逐次通訳の場合はこのインプット、アウトプットの能力の他に上に挙げた「愛嬌、サービス精神、演技力」が必要となるわけです。つまり、ニュアンスを含めて正しく聞き取ったものをニュアンスを含めて正しい訳文にしても、たとえば楽しい話なのに仏頂面で訳しては効果が半減してしまいます。また、その国の人なら誰もが知っているような固有名詞でも相手国の人が知らないと思われる場合には少し説明を加えたり、あるいは名前を挙げられた人がいたらその方のほうに笑顔を向ける、といったサービス精神も必要となります。

つぎに、通訳と翻訳の違いですが、これは通訳は一過性のもので聴衆の記憶以外に記録が残らないのに対し、翻訳は自分の業績なり恥なりが後々まで残ることにあります。だからこそ時間をかけ、辞書を駆使し、推敲に推敲を重ねて訳文を完成させたいものですが、現場では時間に追われて訳せざるを得ない場合も頻繁にあります。センターでもルーチンワークとして業務用文書（手紙、契約、企画書、会議資料等で外注しない文書）を訳さなければなりません。そのような訳を依頼する人は自分のオリジナル原稿が書き上がるのと同時に翻訳文が仕上がっていることを希望するような傾向があり、翻訳者は非常に大きなプレッシャーを感じます。しかも、原文の文法がめちゃめちゃだったり、舌足らずだったり、どう読んでも内容が曖昧だったり、挙げ句の果てに間違っていたりすると非常に気が重くなります。訳を読んでくださる方が原文が間違っているとは思わずに「この訳はひどいな」と思うのではないかと心配になるからです。だからといって原文に勝手に手を入れることもできませんし、訳註だらけの訳を提出するわけにもいかず、悩むところです。

ちなみに、これは通訳の場合にも当てはまることです。ある先生が「ここに五つの問題があります。第一は…」と話し始められたのに四番目で終わってしまったことがありました。会議が終わってから聴衆の一人が私のところにこられて「五番目はなんだったのですか」と尋ねられました。こういう場合の対応にはとても気がつかれます。

広報・出版業務

センター翻訳業務のなかで量的にもっとも大きな比重を占めるのが広報・出版関係の業務です。広義にとれば出版は全て広報になりますが、様々な刊行物のなかでも語学研修部の責任で行なっ

2. ベルリン日独センター（編）『ベルリン日独センター十周年』（ベルリン、1995年）、43頁～48頁

ているのは日本人向けの広報とシンポジウム報告集を始めとする図書の出版です。

日本人向けの広報とは、①ベルリン日独センター広報誌『jdz echo』の日本語版、②東京の日独協会の広報誌『Die Brücke』に掲載する「ベルリン日独センター短信」、③デュッセルドルフの日本クラブの機関誌『日本人会報』に随時掲載していただくシンポジウム関連記事、④そしてセンターの日本人理事および評議員、ベルリン日独センター後援会役員、東京の日独協会やベルリン日独センター連絡事務所に配布している『ベルリン日独センター月報』の作成です。①と②に関しては、ドイツ語で執筆された文章を和文要訳する——つまり原語の文章を要約しながら翻訳する、または翻訳しながら短くまとめる——場合がほとんどですが、③と④に関しては語学研修部スタッフが自分で資料を収集し、記事およびリストを作成しています。ですから、ドイツ語の日本語訳ではありません。^[3]

シンポジウム報告集はセンターで開催したシンポジウムの記録で、原則としてセンター主催・共催シンポジウムの報告集は必ず出版するようにしております。報告集の管轄が広報部より語学研修部に完全に移行したのは1994年の春でした。

一ヶ国語のシンポジウム（ドイツ語または英語）の場合は基調報告者のオリジナル原稿の誤字、脱字等の校正を語学研修部内で行ない、DTPで印刷に回すところまで用意します。

二ヶ国語以上のシンポジウムの場合は入手した原稿をもう一方の言語に翻訳し、それぞれの言語による報告集を出版しますが、翻訳はほとんど外注に出しています。したがって、校正の際には訳文のチェックも必要となります。

むすび

以上、過去10年間のベルリン日独センターの語学研修部の業務を振り返ってみました。「語学研修部」とご大層な名前を掲げていても実際のスタッフは日本人2名^[4]とドイツ人1名で、日本語の授業も基調報告の翻訳もほとんど外部の力に頼っています。出版原稿を仕上げるまでのタイプアップを始めとするPC作業もアルバイトの学生さんなしでは成り立ちません。シンポジウムの同時通訳も外部からの応援を得て始めて可能です。

外国語教育も通訳も翻訳も端的に言えば異文化間の橋渡しの一環です。通訳や翻訳に携わっていると、話者や筆者に相手国の文化に対する理解が不足していたり、あるいは日本語と独英語の違いを全く認識していなかったりするようなことに会う時があります。同時通訳をしている時に言葉遊びの類のジョークや内輪の者にしか分からないジョークを言われたりすると「果たしてこの人は自分のメッセージを伝えたがっているのだろうか、それとも自分の声を聞くだけで満足しているのだろうか」と正直なところ疑ってしまいます。

それでも語学研修部スタッフおよび外部の通訳、翻訳、アルバイト一同、異文化間の橋渡しに精一杯努めております。この『記念出版』にも翻訳の間違い、誤字、脱字等あるでしょう。どうぞ、大目に見てくださいますようお願い申し上げます。

3. 1995年夏に日本人対象の広報業務を徐々に語学研修部以外の部署に移譲しはじめ、最終的に完全に語学研修部の手から離れた。

4. 日本人職員1名が退職した後、日本人1名、ドイツ人1名の体制で業務をつづけている。